

● シリーズ 私の見た日本 Vol.166

「日常」vs「非日常」

温 静(うえん・じん)

中国山西省出身。2006年来日、東京大学建築学専攻歴史系研究室に所属。2015年博士(工学)取得、奈良女子大学ポスドクター・東京大学生産技術研究所博士研究員を経て、現在同済大学(中国・上海)建築学専攻助理教授。中国伝統建築と東アジア建築史の研究を専門とする。



「非日常」としての文化財建造物

私は建築歴史を専門し、文化財建造物や登録文化財のような古い建物を対象に調査研究をしている。日本にいた頃は、東京で日常生活を送りながら、休日になると地方を旅して、お寺や神社を巡ることが趣味だった。

ほとんどの人は、非日常な体験を求め旅に出るだろう。そして、旅先で必ず何かの建物に出会い、その建物を通じ、その地域の人々とつながるだろう。

日本中を旅しながら、普段の研究対象である文化財建造物がいかに地域社会、そして人々とつながっているのかを観察することもできた。

そこで感慨深く感じたのは、地域住民の文化遺産に対する熱意である。彼らは先祖から代々伝わってきた文化財を守る習慣、そして自分の愛する町を盛り上げたいという強い思いを共に共有し、潜在的に文化財の保存活用事業に参加していた。

それは例えば広大な敷地の掃除を手伝うボランティアの高校生達や商店街で散策マップを配布するお店など、その一人ひとりの日常的な小さな働きかけが文化財の保存活用事業にとって大きく、そして不可欠な推進力となっていたのだ。よく耳にする「地元愛」が自然に湧いてくるのも容易に理解できる。

2013年以降、「郷愁」という言葉が中国の

流行語となった。その言葉を聞く度に、故郷である山西省の情景を思い出す。

山西省にある応県木塔は中国で現存する唯一の総木造の塔で、千年近い歴史をもっている。

心惹かれ、何度も訪れているその場所で、最も好きな場所は塔の東側の村にある。小さな民家を前に眺める塔はとても神々しく、千年にわたりこの土地に根付いているように感じる。

しかし、応県の若者に聞くと、世界的にも有名な建物の元で生活しているにも関わらず毎日目にしているが、ほとんど敷地に入ることがないと言う。

応県木塔の元で暮らしている応県の人が、他の地方や国で応県木塔の写真を見たら心の中に「郷愁」を浮かべるのか、私には分からない。しかし恐らく彼らは塔に最も近く最も関係のない人たちなのであろう。応県木塔のように文化遺産と指定された後に、地域から切り離された建物は他にもたくさん存在している。

非日常を極める文化財建造物とは言え、地域の日常から離れてしまったら、いまの時代にどんなに綺麗に整備されても、後世に伝わることは容易ではないだろう。

日常に溶け込む非日常空間

この10月で、上海に戻りちょうど1年経った。現在の就職先は自身の出身大学であるため、十年ぶりに見るこの都市を所々懐かしく感じている。

しかしその一方で、忘れかけた一種の欲求も共に戻ってきた。それは学部時代からこの都市ですっと探していた落ち着ける場所である。日本で過ごした日々を思い出し、いま自分が生活している町にどんな要素を加えればもっと居心地の良い町になるだろうと考えると、最初に思い浮かぶのは非日常的な空間で、さらに言えば聖なる場所である。

日本で有名な寺や神社を巡り、立派な建物をたくさん訪ねたが、最も鮮明かつ印象に残っているのは山梨で巡り合った小さな神社である。

人影の少ない町の一角に立つ、どこでも見かけのようなシンプルな社殿は、おそらく昭和に入ってから建て替えられたものだろう。思った通り無人だった。一息つき、拝殿の前に置いてあるノートを開いてみた。なんとそこには何ページもびっしりと時刻と名前が書かれていた。その日の朝4時から私が訪ねた15時前まで、十数人がここに訪れ、名前を残していた。

ノートをパラパラめくると、その残された名前は地元の人々だとすぐに分かった。同じ

名前が何度も書かれているのだ。散歩のついでに神社の前で一礼をする人はよく見かけるが、ノートに毎回名前を書くことまでこだわるのは初めて見た。非日常的な儀式は、日常的な行動として大事にされているように感じられた。旅人である私もその精神に惚れ、帰る前に丁寧に自分の名前をノートに残した。そのあと、不思議と少しだけその土地とつながったような気持ちになった。

山梨から東京に帰ってからは、いつもどおり歩く道の途中にある石仏や小さな神社に気づくようになった。由緒のあるものもあれば、近所の人でもよく分からないがずっと守り続けられてきたものもある。それらは町のあちこちに存在し、意識してみると驚くほどの数だった。後に分かったのは、それらの施設の日常管理と修繕は地域団体によって行われていることだった。まさに継承されてきた古来のコミュニティ施設であろう。

中国では、7世紀の唐代から近代まで、民間信仰によって建てられた祠廟は国の管理が届かない理由により、「淫祠」として度々禁じられた。しかしほとんどの祠廟は仏教・道教と融和して危機を乗り越え、都市部と農村部に広く存在していた。昨年訪問した河北省の蔚県は、中国農村の昔の日常を見せてくれた。15世紀の軍事施設としての面影が残っている小さな集落の中では、真武廟・観音廟・

五道廟・関帝廟など、数多くの祠廟が人々の日常生活と密接に関係していた。やはり日常の中に存在する聖なる非日常空間は、貧富や職業に関係なく人々を迎え入れ、コミュニティにとって重要な要素だと思う。

現代都市の非日常空間は？

近代化を経て、小規模な宗教空間が都市部から消えていくことは世界中で起こっている。その変化によって、信仰に関わるものだけでなく、人々のライフスタイルも大きく変わり、コミュニティの構成まで影響を受けている。

現代社会は多様性を重視している。同じ信仰や同じ職業を前提にコミュニティを作る考えは当然時代遅れである。異なる価値観の人々が集まる現代都市の中で、どのような空間がコミュニティ作りの需要に応えられるだろう。

芸術施設が宗教施設の代わりに都市の聖なる空間となっているという意見がある。美術館やコンサートホールは歴史上の東大寺や応県木塔のように文化の中心となり、かつて政治性・宗教性をもつ建築も次々と博物館や文化センターへと変容し、いまの時代の精神を表している。その動きの中で、日本が行なう文化財建造物の活用は、その芸術的価値を保存すると同時に、文化的価値を創り出す

ことにも成功していると思う。文化財建造物でしかできない独特な空間演出は、教育・文化交流・芸術創作など様々な面で活躍を見せてくれた。

一方、コミュニティ規模で考えると、日常生活にもっと近い非日常空間の在り方を探求しなければならない。ARソフトの開発は世界中でブームになっている。仮想世界の設定に基づき物質空間で実際の行動を行なうことは人々に好まれる。それはまさに日常の中で非日常を求める心理によるものであろう。非日常空間における一種の新しい形も提示している。

ふと、この夏の出来事を思い出す。石塔を探しに今治市の市街地から離れた野間神社に訪れた。神社に着いた途端、今まで誰も居なかった敷地の中に乗用車が次々と入って来て、車を降りた地元の人々が互いに挨拶しながら集まって来た。何かの行事かと思ひ尋ねると、なんと「ポケモンGO」だった。

コミュニティは変化しながら、日常と非日常の間を往来し成り立っている。非日常の歴史建築の役割を模索することは地域の伝統と未来をつなぐための第一歩だろう。

(執筆補助/南條美代子)



東京雑司ヶ谷鬼子母神堂(国指定文化財)の前で開催される夏市の模様



応県木塔(中国・山西省)の元にある村から塔を眺める



重要伝統的建造物群保存地区群馬県赤岩集落六合村の赤岩神社。六合村には5つの小さな宗教施設も現存している



蔚県(中国・河北省)周辺の集落に小さな宗教施設は多く残っている。昔の生活の一端を見ることができる